

山とスキー

第九十三號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和四年六月二十日印刷給本

昭和四年六月廿五日發行（毎月一回）

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次 目 號 三 十 九 第



記 事

デイスタンスレースのコースに就て

對象としての山岳

スキー運動の生理的特徴及び衛生的注意

筆 の まゝ

其 の 頃

熊 の 話

第十七シーズン略報

雜 錄

寫 眞 版

石狩岳の頂上

ヘルベチユアヒユツテへ

中村新一郎 (一)

井田清 (八)

G 生 (三)

M 生 (六)

廣田生 (九)

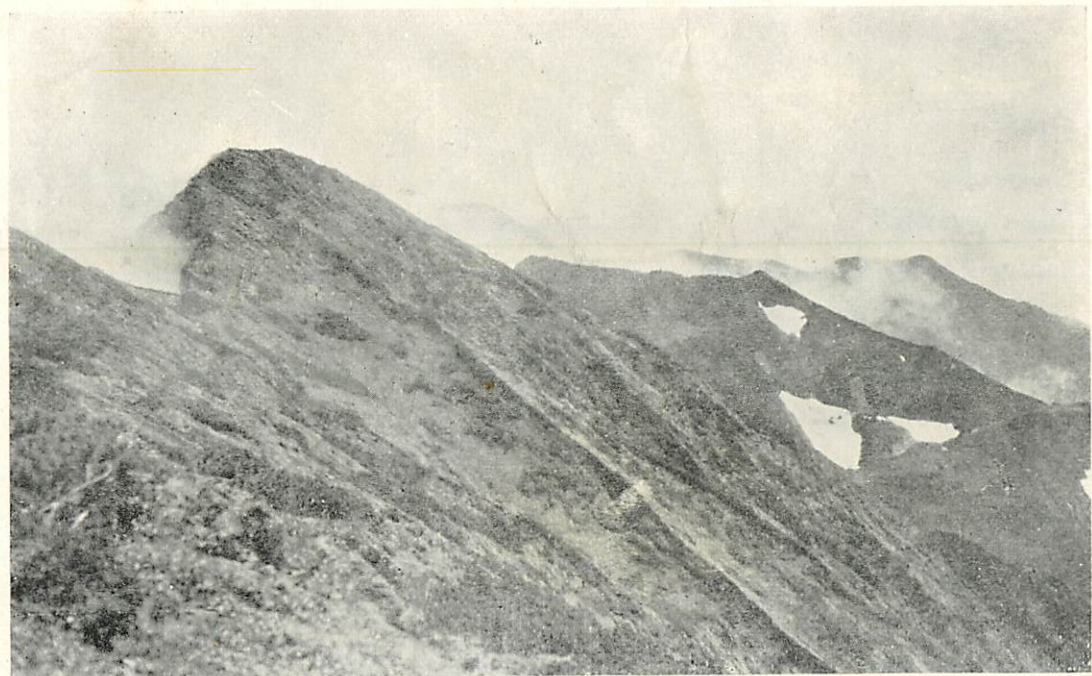
田生 (三)

(二六)

渡邊千尙

平間章

昭和四年六月發行



デイスタンスレースのコースに就て

中 村 新 一 郎

近年吾が國のスキー競技は目覺しい進歩をなして來た。特に今冬遙々ノールウエーよりスキー選手が來朝し、その結果ジャンプ及びデイスタンスレースに於ける吾が國の選手の技術は又著しく發達した様である。デイスタンスレースに於ける技術に就いて見るに、數年以前より行はれて居る三段滑走、二段滑走及び躍進滑走の如きは或る少數の優秀なる選手にては殆ど完成の域に達せんとして居るが如きである。更に又新しくステップターン及諸種の技術が取入れられ、今日北歐スキー諸國に於て行はれて居るスキー技術は略々吾國にても行はれんとして居るのである。且又スキーワツクスの如きものも殆んど全部吾が國に輸入せられて使用せられて居るのである。之の他スキー及びストックの如きも年々改良進歩して來て居るのである。

然るにデイスタンスレースのコースに就て見るに、或る一部は改廢せられて居るも今日吾が國各地に於て行ふデイスタンスレースのコースは大半數年來略々同一のものを使用して居るのである。

然して吾が國のレーサーの僅少のものを除ける以外の多くのものが、スキー技術(デイスタンスレース)に發達を來さざりし原因も之のレースコースの如何に依つて來て居た事は少なからざる事であらう。

吾が國に於けるレースコースは、從來概して單調又は簡單に過ぎるきらひがあり、コース中スキー技術の良否如何により結果に影響を及ぼすが如き部分は極めて僅かにして、全コース中の或る一小部分に止るに過ぎないのである。

元來スキーレースの勝負は、スキーテイクニック、ワックステイクニック及び体力の如何に依る。之の三つのファクターによつて大体支配されて居るものである。之中特にスキー技術の良否はコースの選定如何により、その結果に影響する所甚大なるものである。然してコースの選定は即ち適當なる標高差と全コース中の傾斜面及び平地を如何に配分するか又は屈曲點を如何なる場所に選定するか等に依るものであつて、コースの距離の大小に依り、夫々その距離に相當する標高差をとり、又斜面及び平地を適當に混交して以て三分の一システム即ち登り、降り及び平地の各々を略々全距離の三分の一なる様に配置するのである。

次にコース選定に就て概略を述べて見様と思ふ

スタート及びゴールの位置に就て

スタート及びゴールの位置は一致するを普通として居る最近かゝる事は無いけれど、スタートとゴールの位置（ダーウシヒルレース及び驛傳競走等を除く）を異にせる事があつたが出來得る限り同高な地點を選び又一致せしむる事を要するスタートは一般に平坦地にして、出發してより暫くの間は出來得るだけは多少の緩傾斜地（下り）をとるか、又は平地をとる様にする事が必要である。尤も地形の形狀如何に依りその間に多少の登傾斜の入るは止むを得ぬが、大なる登高路をとらぬ様にしなければならぬ。

同様にコースの最後も緩傾斜又は平地を以てゴールインする様にする事が必要である。

標 高 差

標高差とは全コース中の最高ヶ所と最低ヶ所との高さの差であつて、この標高差の大小は少なからずタイムに影響するものである。

吾國に於ける二三の例に就て見るに

一九二五年	大鰯 十籽 (標高差 四百五十米)	時分秒
		1 02 34
一九二六年	豊原 十籽 (標高差 二百五十米)	55 48
一九二六年	札幌 十籽 (標高差 百三十米)	50 17
一九二八年	大鰯 三十籽 (標高差 約百八十米)	2 50 00
同	札幌 三十籽 (標高差 約三百米)	2 37 30
一九二九年	高田 四十籽 (標高差 三百米以上)	4 01 34
同	札幌 四十籽 (標高差 約三百米)	3 25 12
同	札幌 四十籽 (標高差 約二百米)	2 54 54

之に依て見るに、略々標高差の異なるによつて所要時間も相違して來るのである。殊に短距離のレースに於ては殆んど標高差の大小に比例して所要時間に差異を生ずるを見るのである。

次に北歐に於て行はれた二三の結果に就てその標高差と、タイムの關係を見る。然し單に標高差の差異に依るのみでなく雪質の良否又は地形の難易により相當著しい差が同一優勝者の間にもあるのである。

一九二四年	ホルメンコーレン五十籽 (標高差 約三百米)	時分秒
	一等 Th. Haug	4 19 30
	二等 Ole Hegge.	4 26 05
〃	シヤモニー五十籽 (標高差 約八百米)	
	一等 Th. Haug	3 44 32
	二等 Th. strömstad	3 46 43
一九二六年	ラハター五十籽 (標高差約 百米)	
	一等 Livio	4 18 18
	二等 Kappaleinen	4 26 43

” ホルメンコーレン五十籽 (標高差 約二百米)

1 等 Olav Kjelbohn 3 45 19

2 等 Th. Hegge 3 46 10

一九二七年 ホルメンコーレン五十籽 (標高差 約三百米)

1 等 Henry Gjostien 4 46 53

2 等 Ole Hegge 4 47 20

之に於て標高差約百米のラハターの五十籽の結果が標高差八百米のシャモニーの五十籽の結果と著しく異つて居るのは恐らくラハターのコースが險難にして、且傾斜面の配置に宜ろしきを得なかつた事等に依るのであらう。

次にコースの距離の大小に依つて標高差は又異なる事を要するのである。別にある一定の距離のコースに對する標準的標高差なるべきものは無いけれども、今までに於ける實際に就て見ると

コースの距離 標 高 差

十五籽 — 二十籽 二百五十米 — 三百米

三十籽 — 四十籽 三百五十米 — 四百五十米

四十籽 — 四十籽 四百五十米 — 五百五十米

即ち標高差がコースの距離に比し、大いに過ぎる時は一般に困難となり、その結果良好なる記録は得難く、コースとして餘り良くない。

次に前例に於て見る如く、レースの記録はコースの標高差のみによつて決するものではない。登降傾斜面の急緩及びその傾斜面の配置、又その間に挿入する平地によつてコースの良否は決するのである。

傾斜面及び平地に就て

コース中の傾斜面の緩急はスピードに影響する事極めて大である。概してコース中の傾斜面が急な時は記録は餘り良好でない。それは同じ標高差を有するコースにして開脚登行及びサイドステッピングを行ふ斜面の多きものと、然らざるものとの記録を見れば明かなる事である。然し記録を本意として緩傾斜面のみをとる事は地形の關係等により不可能な事にして、且それでは良好なるコースとは云へぬのである。即ち緩急傾斜を適當に配合しコースをして變化に富ましめる事が必要である。

さて平地コースの多少はそのコースの記録の良否に關係する所著しきものである。

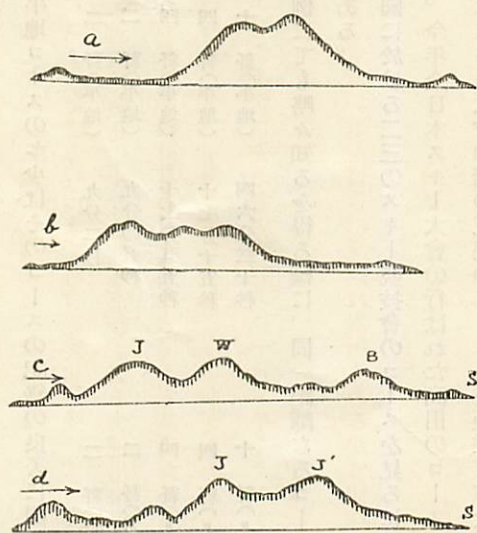
二 秆(平地)	九分二秒	二 秆(斜面)	十二分五五秒
二 秆(平地)	九分〇五秒	二 秆(＃)	十分〇〇秒
四 秆(平地)	十七分五五秒	四 秆(＃)	二十一分〇五秒
四 秆(平地)	十七分十五秒	四 秆(＃)	二十二分三〇秒
十 秆(平地)	四六分三十秒	十 秆(＃)	五三分

以上の例にても略々知るを得る様に、同一距離なるコースにて斜面コースと平地コースにては少なからぬ時間に相違があるのである。

吾が國に於ける二三のスキー競技會のコースを見るに、平地を連續的にそのコースの略々三分の一を占めて居る様がある。今年全日本スキー大會の行はれた高田のコース、昨年第一回インターカレージの行はれた大鰐のコース及び昨年の全日本スキー大會の際の札幌のコース(長距離)等は平地と斜面との配合状態が頗る宜ろしきを得てないものである。高田のコースにしる、大鰐のコースにしる、平地より最高地點まで連續的の登高で又その最高地より平地までは殆んど之又連續的の下降斜面で、その斜面の間に平地らしき平地を殆んど存在して居ないのである。又平地は全コースの略々三分の一を占め、その間大した起伏を殆ど認めぬ状態である。同じく三分の一システムのコースではあるが、かゝる三分の

一 システムのコースは最も單調なるもので、斜面及び平地の配合最も良しからざるものであらう。

次に、札幌に於て行はれた第二回インターカレージの十八籽コースと、北海道豫選の際に用ひられたる十八籽コースに就て比較して見るに、兩者共未だ良好なるコースとは言はれざるも、高田及び大鰐に於けるコースに比すれば少なからず



a 圖は高田に於ける全日本スキー選手権大會の時の十八籽のコースプロフィール

b 圖は大鰐に於ける第一回インターカレージの時の十五籽のコースプロフィール

る J S は著しく單調であつて之の間に多少の起伏及び平地を挿入する時は略々完全なものとなるであらう。

然して之等の c 及び d なるコースを改良し、完全なものたらしむるには之等のコース中の傾斜地を尙幾多の小傾斜及び平地に分け、更に平地に尙多少の小起伏を介在せしめる様にコースを選定する事である。

從來各地に於て行はれたスキーデイスタンスレースのコースは、尙幾多の改廢すべき點が多々あつて、今後益々研究の

優れたるものと見なければならぬ。圖の c は第二回インターカレージの際の十八籽コース縦斷圖にして d は今年度の北海道豫選の十八籽コースである。兩者共吾が國に於ける短距離コースとしては相當良好なるものであるが然し前述の如く未だ技術本意のコースにはなつて居らぬ。c d 兩コースは略々同標高差を有するものである。c 圖に於て J W 間の登降傾斜面は單に降つてそして登つて居るものであるが d 圖に於ける J J' 間は J W に比し、その間に平地を配置する事はコースの選定上前者に勝つて居るものである。然し d 圖に於け

余地あるべき事と思はれる。尤も地形の如何により完全なる迄とは行かなくとも、或る程度まで之に近きものを得られる事と信するのである。

次にコース選定に就て特に注意を要する事は、或る程度まで競技者以外の人々（見物人又は通行人等）に依り荒らざるべきコースをさける事である。即ち地形その他の關係に依り止むを得ざる限り道路以外の場所を選定する事である。同時に又一般スキー家即ち競技見物人及びその他の人々がスポーツ道德によりコースに立入り、又はそれを荒す様な事をせず競技者に對し出來得る限りの援助と、後援をなすべきであらう。

次にコースは或る程度まで雪質の變化を受けざる様な所を選ぶべきである。例へば尾根の上を走るコースは陽光及び風に依る雪質の變化の少なき側を選び、又その他出來得る限りは森林地帯（又は樹間）を選ぶべきである。

それから又時に良好なるコースをとりうる場所があるにもかゝらず、通信機關の設置、又は走路觀察員の配置關係上遠隔の場所にコースを選定するをきらひし事等もあるが、吾が國スキー競技發達の上からして多少の困難は排しても良好なるコースの選定に充分考慮研究され一日も早くランナーをして、完全なるコースに於て十分技を競はしめん事を希望して止まないのである。

とりとめもない事を書き、又誤れる所もあるかも知れないが、一重に讀者諸賢の御判讀と御寛容を乞ふ次第である。

對象として の 山 岳 (三)

井 田 清

前章まで感傷の多い自分は寒氣を覺へながらも書いて來た。手紙文で或日自信に満ちた口振りで全く自分の心の儘に呼びかけたい氣持や、自分にうなづきたい氣持や、それらのものを雜然と自分は書き集めて來た。そして最後に、の一二年來の自分と山と、それから何かそれらのものを豫想したい自分の先きの心を書いて此の全文を締め括つて見たいと思ふ。

前章のあらゆる所で自分の心は山を「私」或は「我」と言ふもので切り取り或は區劃して來た。

けれどもつと心に親しい自分の重心に身近な言葉で「私」或は「我」と言ふものを示さうとするならばそれは實在^{エトワッテス}と言ふ事である様だ。さう、山は確に我の上に立つて實在^{エトワッテス}である。

山が何かしら季節の様に自分の心へ訪れて來る事がある

心といふ廣い深い無邊な生活感情の衷へ全く山と言ふものが、待ちあぐんで居た雪國の春の様に「たう／＼やつて來た」と自分に安心と歡喜の複雑な感情の跡を残して又何時とはなしに過ぎ去つて行く事がある。

自分は明に心にある山を實在だと叫び得るけれど、その實在はまだ自分の心の衷で「*Das Ich*」として強い重心を形づくつては居ない。希望と歡喜の底に未だ不安をふくめて「信じ乍らその内で動搖して居る。自分の心は山を「*Das Ich*」としか呼び得ない。或時は實在といふ確固たるものゝ上に強く立つて居乍ら自分は意志を必要とする男である。眞實を心に感じ豫想し乍ら信仰の周邊を意志といふ馬に乗つてグル／＼廻つて居るに過ぎない。

そして自分は自分にその馬を乗り棄てさせる象は確に山



だと思へる。その外にはあり得ない(の三)と思ふ。(勿論自分は山の象をさして居るのではない。)

きつと眞實は最後に意志を碎いて自分に何ものかを命ずるだらう。丁度風景の裏に抱かれて人間の心がそれと通じ溶解け得られる様に。そして前章でのべて来た山と「我」の關係それからこの實在との關係については丁度人が山に行つて其處で眠る(野營)場合其處に起つて来る色々な心の動きに依つて理解されはしまいかと思ふ。この場合ホテルとか旅館といふものは問題外である。それらは旅の内に或姿を形成して表はれては来るけれど、今の場合それを少しさし置いて、山に宿る泊る眠る時の心と言ふのは誰れしもが感じて居る心である。

森林の中に谷間に、或は河原に、或は尾根に、雪の上に一日の夜を眠らうとする心(人間)は自分を取り巻く凡ての象と或理解を以つて安らかに溶け合ふ様だ。

歩いて居る間によく解らなかつた自己の周圍の風物が、いざ其處に泊るとなると或深い親しみと、安らかさを以つて迫つて来るであらう。河原に眠る、木蔭の雪穴に眠る、するとそれらは不思議にも皆んな親しいものとなる。

自分の周圍に言ひ難い落著と調和が自分をひし／＼と抱き包むのを心は感じないだらうか。長い山歩きの内に見る幾つかの焚火の跡、或はもつと手近かな頂きや見晴臺の附近に投げられた空き罐、紙屑或は綠草の上に残されたもの等、若しも自然の衷心が「我」に觸れ、暖い氣持を植ゑつけられて居るならば心苦しいそれ等をも許し合へる様に思へる。

それら山、風物、自然の内で呼び覺されて来た「我」は又他のあらゆる對象の内にも見出されるものである。そして山に近づきつゝ生きて行く一つの個性の内に初め最も戀愛に近い感情を、そして次いで愛を「我」は吾々に呼びかけて呉れるのである。

對象によつて心の裏に胎兒の様に動き始めた「我」と、それが歩んで行く個性と云ふ道、そこに絶へず吾々を苦しめ誘惑するものは何か反抗の本能の様に思へる。愛や戀愛の感情以前に自分は確に山に對してもこの「反抗」に苦しんだ。理性や義務や道德やそれらに何かしらゲンと叛いて見たい、力をゲンと張り合つて見たい。心を引き張つて見たい。それらの動物的な無秩序な感情は自然への理解の第一

歩であるこの「我」の意識の底でも絶へずうごめいて居る暴威である。山で全く放たれた心の感ずる不安、或は残忍性恐怖に對する暴力、理性を打ち碎く本能の力、それらを自分には心に明に感じて居る。放たれた自然人（原人）には至らなくともそれらの心の衷にも自分は明に惡への誘惑や制御しまれまい本能の源、裸体にされた自分の姿を怖しいまで見出す事が出来る。

その怖しさを感じれば感ずる程自分はこれらの對象の裡で視られる相に耐え生きて行く事に限りない喜びを感じるのでしてそれ等の相に少しづつ觸れ出した自分の感傷多い心は前章（一）に述べて來た貧しい喜び、又その貧しさに對する良心の喜び以上に何んとも呼び難い感動を以つてこれら自からの相の前に耐へて行かなければならなかつた。例へこの眼に見えない反抗心が原惡であつたにしても自分は對象の前に自らの實在をちつと續けて行かなければならなかつた。

自分は山を對象と呼んだそれは自分の様に弱い心には耐へなければならぬ一つの象だからである。そしてそれらの對象自らの相の衷に約束せられるものは歡喜びであつた。

今自分はこゝで餘り一般に考へられて居るその山から離れたくないために（勿論對象としての山岳はその根底にあつて深い哲學的基礎を必要とするであらうけれど自分は最初にものべて來た通り自分の生長と共にそれ等を築いて行かうと願つて居るのであるから、自分の文中にある言葉の不充分ひいては自分の心の貧弱さをも措いて自分のものとも他人のものともつかない歡喜びを求めて行きたいのである）——自分は左に自然の裡に包れた一つの心の眞實の言葉——を擧げ様と思ふ。

「旅行中の事だつた。私が偶然に足を止めてゐた處の周圍の景色は、何んと言つても偉大で崇高であつた。確にこの瞬間何物かど心に入込んだのである。私の考は大氣と同じやうに輕やかに躍つた。憎惡とか卑猥な色情とかいふ卑しい希望は、この時自分の足の下の奈落の底に漂つて居る雲の様に遠ざかつて居るやうに思つた。心は私を覆つて居た大空の様に、澄み渡り且つ廣々として居る様に思つた。地上の出來事の思ひ出は、遠く非常に遠く他の山の腹に草を食んで居る見えない家畜のその鈴の音のやうに弱められかすかにされてゝ無ければ心に湧いて來ないのであつた。」

非常に深いために黒く見える静かな小さい湖の上を、空を横切つて飛ぶ空中の巨人のマンツの反映のやうに時々一片の雲の影が通り過ぎた。

この全く静かな大いなる運動に依つて誘發された壯重且稀有な感覺のために全身は一種の不安が交錯する喜びで一杯であつた事を私は記憶して居る。一言にして言へば人の心を興奮させる美のために私は自分自身と又全宇宙と完全な平和を得て居る事を意識して居たのである。その時この上もない完全な幸福に浸つて居て地上のあらゆる悪を盡く忘れて居たために、人間の天性が善であると主張する新聞をそんなに滑稽に思はないやうになつて居た様にさへも思ふのである。……」(シャルルボードレル散文詩葉子的一篇 高橋廣江譯)

これらの裡に吾々は必ず對象と心との間に語られる眞實の言葉を見出す事が出来る。よく例に挙げられるバイロンの或詩よりも、一層確に明に吾々の身近く迫る言葉を感じる事が出来る様に思はれる。「我」について或はカントの Das radicale Böse (原惡)と言つたそれらのものをまで自分を感じさせられて居る。確にその様に思へる。

其處で自分の述べて來た「我」はそのあらゆるものゝ相の上に立つて實在と呼ばれる。「我」は必然といふ根によつて芽を開かれた花の様に自分の心に向つてそれは實在だとよびかけて居る。感すべきものに感ずる感傷の小板が無數に必然といふ太い幹にその小さな元を埋めて居る。そして幹は日に／＼グン／＼育つ。そして今實在といふ白い花をつけて居る。そう自分は想ふ、考へて居る。しかもそれは良心に芽生える。信ずる事によつて強固にせられる。

獨り立つて行く事によつて其處に個性と言ふ樹冠を創つて行く。無數の感傷の小枝から抜けて―善き孤獨と誤られた孤獨との意識的混同から抜けて實在の上に一本の樹が生長して行く人間の心を限りなく懐しく想ふその時から何かしら眞實の孤獨が―一人の人間がその心を愛の海に浸すのではなからうか。

人と共に人波に浸つて―山の裡に抱かれて居る心の儘自分はあるまゝに廣い人の心の裏に生きて行きたい。さう願つて居る。やゝもすればひとりよがり(意識的混同)になる自分であるから。底知れぬ反抗心にゆすぶられながらやゝもすれば人生をこそばやく想ふ自分であるから。

廣い室の片隅に立てられた屏風の様に山は確に自分の心に何物かを區切らせ植ゑつけて行つた。今自分は過去を振り歸つて山を對象と呼ぶ事が何か自からの心に溶け切れないものを感じる。「山は何んであつたらう」と自分はそれを先にどれ程續いて居るか知れない世界を豫想する熱い心で今更らの様に鮮しく想ふ。今よりも「それは何か」であつたこれからもそれは「何か」であらう。唯自分の心には耐へて行かなければならない「もの」が「何か」がはつきりと心の血を湧かせて居る。

自分は歡喜にさへ冷く耐へなければならぬ自分の心やそして又山や空や土や闇の様に奥深いものを確り胸に抱きとれさうな豫感にふるえて居る。

あれが人生だと言ふ、これが人生だといふ。そしてこれこそ山だといふ。それは私の關した事ではない。自分は唯「これもかうあらうか」と小さな實在エッセンスといふ階を踏まうとしたにすぎない。自分も又 *Tot chaos* である事をそして又 *Selbst* である事を想ふ。

山の姿、そして自らの相すがた、そして耐へなければならぬ心、自分はそこに弱い頭と心の重さをありのままに下けて

居る。さうして居れば自分は生きられるからである。山と共に。 (未完) 一九二八—九一五

附 記

自分はこの稿を未完として閉ぢたい。それは後に *Morgenthal* の *‘Ich selbst’* と *Hoek* の詩集 *Dir* にある *So ist das Leben* についてもつと詳しく書かなければならない責任を感じるからである。そして初めて心に植えつけられた山の姿が明にさればしまいかと思ふからである。

何も *M* 氏と *H* 氏のものにかぎられた事はないがそれが自分達にも親しい氣持がするからである。



スキー運動の生理的特徴及び 衛生的注意

G

生

スキーがウインタースポーツ中で最も奨励すべき價値ある運動である事は、我國に於ても既に廣く信ぜられて居る所である。その一部の觀察としてスキー運動の生理的特徴を摘出し、猶簡單に衛生的注意を擧げて見る。

生理的特徴

一、スキー運動は全骨格筋を働かせる所謂全身運動である従つて全身の筋肉の平等なる發達を計る目的に極めて適當して居る。殊に腰部、上腿部、肩部の筋肉は甚だ強く使用せられ、又腹部、下腿、上前膊の筋肉の勞作も著しいものがある。

二、スキー運動は上述の如き全身運動であるから、之等諸

筋肉に新鮮な酸素血液を送る爲に、呼吸器の發達が充分となり、心臓の鍛鍊が盛んに行はれる事となる。

三、スキーは全身の諸筋及び心臓を強く勞する、可成過激な運動であるので、極めて短時間のスキー運動にも冬の寒風中に發汗を大いに見るものである。従つて短時間にも充分に運動の目的が達せられ、發汗により身体の新陳代謝機能が著しく高められる。

四、寒風に當る事によつて皮膚の鍛鍊が行はれ、風邪に冒されるを防ぐ事になる。

五、白皚々たる冬の山野は、夏季の諸スポーツ或は都市の中に行はれる運動に於ける塵埃或は煤煙より全く放れて、スキー家に純潔の空氣と爽快の氣分を與へてくれる。呼吸

器の健全の爲に甚だ望ましい事であり、又四圍の美しい自然に接する精神の愉快は他のスポーツには殆ど望む事が出来ない。

六、各スキー家がその技術に相當するスキー術を振ふに於いては、その快速なる滑走、變化に富むスキー滑降中の技術に對し、瞬間的所作を必要とする事が甚だ多い。運動神經の發達の爲に申分なく、且つ登行に對する苦惱は克己忍耐の精神を養ふ上に絶大の力があり、猶滑降飛躍の際に養はるゝ勇猛心に至つては、殆ど他のスポーツの追従を許さないものがある。

七、猶スキーは過激な運動であると同時に、緩やかに行へば虚弱者にも適する極めて保健的な運動で老若男女適さざるはなく、兒童の完全なる發育を促し老年の元氣を若々しくせしむるには雪國に於ては欠くべからざる運動である。

衛生的注意

一、スキー運動はその行ふ程度によつて、強くも弱くも行はれるものであるから、自己の技術、體質、年齢に相應した運動をして、決して過勞を來さぬやうにしなければなら

ない。殊に虚弱或は幼老者は此の點に注意を拂ふやうにすべきである。猶競技出場に際しては特別の注意が肝要で若年者は決して長距離競走に出場してはいけない。

二、疲勞に對しては充分の休養を爲し、常に元氣潑刺として練習すべきである。充分の休養の無い衰弱せる身体は寒氣、風雪等の影響を受ける事が甚だ多い。

三、寒氣に對しては充分の注意を要する。寒冷の空氣は常に鼻孔より呼吸して呼吸器を保護し、發汗後の衛生的處置は敏速に行つて寒冒にかゝらぬやうにしなければならぬ。

四、服装は防寒、防風、防濕の三點が重要であるが、餘り厚着して發汗に過ぎるやうでもないけない。寛容、輕快で而も上述の條件を具備したものがよい。婦人の服装に就いては殊に合理的に考へて注意を拂はなければならぬ。

五、食物は防寒の目的に適つた含水炭素脂肪の類を比較的多く攝るやうにする。消化し易い滋養あるものを選ぶ必要がある。アルコール性飲料其の他の刺戟品は力めて避けなければならぬ。又練習中雪を食ふ事は是非避くべき事である。

六、スキー運動は可成激しい運動であるから、打撲、關接

の捻挫、或は骨折が起り易いから、練習中は技術に無理を加へぬ事が肝要である。又スキーの尖端、杖等も以外な負傷の原因となる事もあるから注意を要する。負傷を受けたら速やかに適當な處置を受けねばならぬ。猶初心者者の練習場の撰擇は雪量の豊富な危険の少い所を主として搜すがよい。

七、凍傷は服装の欠陥から來る事が多いが、局所の不充分



な血行、スキー家の體質コンディションにもよるものである。風雪の烈しい時は常に細心の注意を拂ふべきである。又春季の日光の強い時期の晴天或は薄曇りの日には、雪眼の豫防の爲に有色眼鏡を忘れてはならない。

猶此の他スキー術の程度の高い部類に入る所のジャムビング、競走、山岳スキーに従ふには、それらの専門的の衛生的事項に對する注意の必要なるを忘れてはならない。

筆のまよ

M 生

東京の騒音とめぐるまじさとは、私の神経をいらだませてしまつた。

雪の世界、單一な純白の世界、パージンスノウを破るスキーの快い靜な音が、私をたまらなく引きつける。

悠久の自然を持つ札幌に育つた私は、今までこんなに雪の世界をあこがれた事はなかつた。常の神経の状態では生話し得られない都會人が、年々冬を愛し、スキーを愛する様になる氣持が本當に解る様になつた。

スキーはスポーツとして以外に、北國人にとつては、冬或は雪を征服するために、都會人には、靜寂な悠久な自然にひたる事のために、益々その普及の度を廣めて行くであらう。

五月七日の夜、吾々の恩人ヘルセット中尉は、西伯利亞經由で故國諾威へ歸つて行つた。先に歸つて行つたコルテールド、スネルスルド兩君は恐らく今頃は故郷で、遠い日本、彼の國の人々には、いつも太陽が暖く照り、富士山の下には櫻が常に咲いてゐる暖國としか考へられない日本の雪深い冬の思ひ出を語つてゐるであらう。

この三諾威人が、何を日本のスキー界へ残して行つたか彼等の残した功績は、今こゝにあけるべくあまりに多い。今年のシーズン終り近くの競技と昨年のを比べると比べるならば、その進歩の著しいのに一驚するであらう。日本のスキー界はこの冬、幾冬分かを一遍に進んでしまつた。

最早、スキー競技に残された疑問は一掃されてしまつた。此からは日本のスキー家は、今までの獨習時代と異り、彼

等によつて示された確な道を歩んで行けばよいのである。目標は高くかゝけられたのである。吾々は只一途それに突進すればよいのである。

アメリカで催される次のオリンピックで、如何程までに日本は進出し得るであらうか。

來年、その翌年、日本が今年の様な調子で進めば甚だ有望であると思はざる。

今度の諾威人の招聘は、秩父宮様の御思召により大倉伯爵の御力に依つて實現したのである。この様な一大快事がこんなに早く實現しやうとは何人も豫想しなかつた事だけに、皆の喜びは一入であり、宮様と大倉男にさゝける感謝の念もまた甚だ大であつた。

これにつけても痛切に感ずるのは吾が全日本スキー聯盟の無力な事である。今度の事などは本當は全日本スキー聯盟がなすべき事である。大倉男の様な方があつたればこそこんな大きな喜びが、我々に與へられたが、そうでなかつたら一体何時諾威人が日本へ來たであらうか。オリンピックへ選手を派遣する時でさえ一文も出せなかつた位である

から、そんな大金はとても出せる筈はないのである。外國のスキークラブの金持なのに比べて吾スキー聯盟の貧乏さは全くお話にならない程である。聯盟の當事者も色々心配されて居り、既に寄附金で幾許かの基本金が出來たと云ふ事であるが、寄附金にたよると云ふ事は甚だ頼りない事であり、またあまり快い事でもない。

日本のスキー競技會でも此の際入場料をとつたらどうであらうか。

そのお金が正しくスキーの爲に用ひられるならば一向に差支へはあるまい。

入場料による以外に、スキーが大衆的に進歩する望みはないと思はざる。

現在行はれてゐる全日本選手權大會でさえその費用は開催地の負擔である。即ち開催地のクラブが、その附近で集めた寄附金によつて行はれてゐるのである。どうせ少數の人々(スキーに何等關係ない人々からさえとる事が多い)から寄附金をとるのならば、もつと多くの本當にスポーツを愛する見物人からお金を集めたらどうであらう。見物人も競技を見る當然の報酬としても入場料を出すべきである

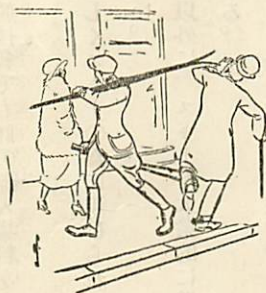
只こゝに注意しなければならないのは、クラブを正しい組織の下に、正しい精神の下に保つておかなければならない事である。

正しい組織と正しい精神。このもとに行はれるならば、入場料徴收によつて日本スキー界は大きな隆盛に到着するであらう。

今度来た三外人のスポーツマンとしての立派さには吾々は實際感心してしまつた。

アマチュアスポーツマンとして彼等は實に立派であつた。ヤンキーの大選手等とは雲泥の差である。北歐人の粗朴な性格が實に美しかつた。彼等と比べて吾々の周圍に多くの汚れを見出しはしないか。

日本人は、もつと社會的な道徳を學ばねばならない。彼等と比べて、各スキー地で色々な恥かしさを比較的年とつた人々から体験したのは甚だ残念であつた。古い人の時代はすぎて行く若いヂエネレーションによつてもつと美しい時代を作らねばならない。



其 頃

廣 田 生

これは私が札幌へ来て、スキー部と縁を結んでから、是迄になる間の、ほんの小さい昔、といふと馬鹿に古臭い様ですが、今日までのほんとに小さい思ひ出であります。

私は今日此處に私を學校のノートより以上に、名教授の講義以上に私を精神的に人間的に育て上げてくれたスキー部、そして又一種獨特の暖い心良い氣持の特色を持つて居るスキー部の過去、現在の多くの人達にも合せて感謝の意を捧げたいと思ひます。そして心からの感謝を捧ぐると共に、益々將來共このスキー部といふ一つの大きな有機体の正しい發展を祈りたいと思ひます。

青山温泉のスキー合宿

どんなに良くつて自分は十何回も冬と春と合せて、行つたんだつたらう。

温泉宿の綺麗さであつたか、湯の暖さであつたか、食事の割安な勢であつたか。いや／＼そんなものは未だ私の心を曳きつけるには余りに小さい事柄であつた。

あの昆布の驛へ着いて、遙か青山の彼方を超えて聳いて居た後志の山々、それは無論私の心を此青山の温泉のスキー合宿に十何回も曳き寄せた大きな力に相違ない。そして又合宿して居る人達の氣持の良いこと、あの熱と力と、情と心とびつたり合つた合宿それが文句なしに私を青山の合宿に十何回も誘つたのであつた。

勿論シヤンツェを作つて飛ぶこと、それには可成り義務的な苦勞も負はされたこともあつた。然し、夫れは互に我慢し合ふて行かねばならないんぢやなからうか。

自然の力と人間の深い温情、それが凡べてあると私は敢て云ふであらう。そしてあの合宿生活こそ私が札幌へ来た印としての最も私の一生で恐らく、此スキー部に關係したと云ふことに次いで深い／＼想ひ出にならずにどうして居よう。

合宿ちや随分鏡く叱られたこともあつた。クソミツに言はれたこともあつた。氣分がすぐれずに休みたくとも休めなかつたこともあつた。そこを忍ぶところに人間的の修養も出来上つたと思ふ大抵なら少し上達してくると班のリーダーの滑り方なぞに批評的

の眼を向けたがる人達が出易いものである。然しリーダーに向つて不満や不平をならす人の聲を殆んど耳にすることがなかつたといふのも畢竟、私共のスキー部の合宿方法が良かった爲ぢやあるまいか。又リーダーの氣持を皆が察して居る程に賢明であつたのであらうか。私共のスキー部の合宿が、他からコーチアーを招聘する必要がない状態にあつて、部員の古株がリーダーとなるといふ點に十分特色があつたやうである。兎に角時と共に、日と共に凡べての技術や、道具までが改良されて行つて居る。夫れ故リーダーになる人達が自分の嘗て一班員として習得した時代の事々が自分のリーダーになつた頃には殆んど班員に傳へるには余りに貧弱なことゝして打消されて行くこともあるかも知れぬ。然し貧弱なるが故に、淺見なるが故に傳へず無責任にコーチするといふことは、全く見受けられない。

少くともリーダーは自分の知り得た智識を、全部傳へ盡し、語り盡してくれて居たやうに私には考へられた。そしてそれを眞面目に私共は練習した。そして教へられたやうでない様なことが後になつて發見された時には、早速相談した。そして互に考究して確實な或何物かをつかむことが出来たやうであつた。そして私は其時決して教へてくれた人の淺見などを問題にはしなかつた。不満も言つたことはなかつた。私にはリーダーになつて教へてくれた人が自分のベストを披歴してくれて居ると何時も信じて居たからである。少くとも或時代まで或事に對する考へが「斯うである」と信じられて居る間は、その事がそれで良いから成り立つて生きて居るのである。それが或時代に行つて變つて來たからとて其昔

の人の當時のことに不満や嘲笑を投げるのはどうかと思ふ。何故なら、その當時にはそれが改良されるゝまでに到らなかつたと云ふまでのことではないか。改良された様に思はれる今日のことでも又、後に到つて昔に返ることがあるかも知れない。要するに事々は當座に直面して居る人達が斯うと信じて改悪宜しきを得て、一つの事がより確立されるゝまでのことではなからうか。なんていふ様なことを私はよく考へることがあつた。さうした氣持で私は先輩にも接し、友にも接して楽しいスキーの合宿を、度重ねて來た。先輩と後輩とが一つになつて融合し合つて事々に當つて之を確立して行く點に於て少くとも私共のスキー部の特色は存在して居たと思ふ。

合宿も此意味に於て非常に價値があつた。

礮砂の様な雪、

肩を並べ合つて居る後志の山々、

痛快な直滑降、

球數繼ぎになつて居るオカマ渡り、

ブツツリと割る間からポーと眞白に氷つて行くムスピの味ひ、

練習場の下の小屋の一杯の味噌汁の味、

カンカン照りつけられて雪は一層眞白に輝く、誰の顔も眞黒に

燻される。その黒い顔、

何一つ思ひ出の種にならぬものとしてはない。

ムイ・ネシリ岳へ

あつ、いけない。

靴がすっかりカン／＼に氷つて堅くなつて居る。

ストーヴにあて、皮を軟かにせねばならぬ。

彼れ此れして、とう／＼出發が遅れた。

もう午前八時半だ。

胡桃澤をジツクザツクで登つて、それから長尾山へとつつかねばならぬのだが、長尾山の尾根に懸つて居る雪庇がとても大きい登つて行つてもとつつけ相もない。仕方ないから長尾山を左に見る様にして路を求めて行かねばならない。

天氣は悪い方ではないが大して良い方でもない。

今日はムイネシリを一つ登つたら早速下らねばならぬだらう交互にラツセルをし乍ら胡桃澤のドン詰から見晴らしのきく處へ出た時はもう大分時間がかゝつて居る。

それでも流石に人も動物も見へない北海道の山奥だけに冬の景色は格別だ。白樺の皮も自然のまゝにくつついて居てナイフやナタなどで無茶苦茶にはいだあとは少しも見えない。

もう長尾山からの續きの尾根に出て、見晴しのきく邊りでは、すぐ眼の前にムイネシリが、まるで南アルプスの北岳の方から仙丈岳を眺めた様に、どつしりと落ついて廣い肩巾をいからして立つて居る。景色や雪や、氣分の申分ないことは云ふまでもない。

ムイネシリの頂についたのが午後一時半頃であつたと思ふ。流石に寒い。零下十七度だ。然し北海道のこれ位の山へ來ての零下十七度は別に驚く程でもないかも知れない。

余市岳が薄々見える。何だか馬鹿に近くに見えて余市へこれから行つて、直ぐ張碓の方へ下れ相だが聞けばとてもそんな

馬鹿なことが出来るものぢやないしかられた。

板さんが札幌へやつて來た未だホヤ／＼の頃であつた。

流石に板さんは黙して居た。でもあのムイネシリの大きな雪庇の上に立つた板さんの寫眞は永久に其頃の印象を私の頭に刻みつけてくれるものである。

秋に中山峠を越えて居る板さんは、遙か彼方の峠の小屋を黙然として、今ムイネシリの頂上から眺めて居る。中山峠を中心にしての好いスキースロープは無数に今吾等の指呼の間にある。

午後二時、一齊に定山溪の方向目懸つて滑走し出した。

ムイネシリの膚に肋骨が刻まれて、今にも雪煙りの中からムイネシリが動き出し相に見える。さよならムイネシリ。

琴似合宿の記帳

もう薄暗くなつた。

友は未だ學校から歸つて來ない。

又今夜も吹雪か、凄い青光りを眞白な地上に投げて切れ切れの雲間を月は疾走する様に揺いて居る。全く大きな火の塊が空中を飛んで居るやうだ。

明日晴れてくれぬと、又飛べないことになる。

おーい。今歸つたぞ。寒いなあ。外は大した吹雪だ、未だ明日も晴れ相もないや、練習が出来なくなると泣きたくなるなあ。

今しがた、家の前をカラ／＼と音をたてて居た馬櫓の音ももう大分遠くへ行つたと見えて、かすかな音を私達の耳に送つて居る。外では馬櫓の鈴の音とビュー／＼と云ふ風の音と、それに近

所で泣く赤兒の交響樂が開える。

友との楽しい晩飯のスキヤキも終つた。

おうい紅茶でも呑んで蓄音機でもかけて少しくつろがう。

何から始め様か、其間に俺がお前の明日のドイツ語を譯してやるからなあ。うん單語だけ引いて置いてくれ。俺はホルンの練習をするよ。

何だ、いやにストーヴの燃えが悪いなあ、やつぱり吹雪で外から風が煙突の中へ逆に入つて来るからなんだらう。

他から考へたら何の爲に學校へ通ひ乍らジヤムプの合宿などやつて居るんだと思ふだらうなあ。

だが俺達の今やつて居ることは、決して全部無駄に終ることもなからう。病みついちやつたんだから、どんな天下の名醫の藥を盛つて來られても癒えつこないんだ。

○

おい、チョンやらう。

あのお風呂が沸きましたからお入りになりませんか。

いやどうも有り難ふ。今日は皆んな札幌で少し暇な時間があつたんで入つて來たから折角ですが、又此次にして頂きます。とは四人の合宿員の一人の親家の女中さんへの返事。

チョンのワン、グループのメンメンはと云へば、いざと云へば筆先の點數の書き様で幾人でも落第といふ運命にまで學生を悲觀させもし、又甘い點でとても仕様のないやうなのでも助けてやることも出来るといふ、鬼の様な役も出来るし、福の神の様な役もつとめ得る大學の先生様。曰く並洲。その次に並んで居るのがもう

大學を出様と云ふ卒業實際の忙しい御大、馬力屋で通つて居る通稱後チャン、何しろ札幌のすぐ隣村の琴似へ三學期の忙しい時に學校へ通ひ乍ら滑つたり飛んだり仕様でんだから恐れ入つたもの馬力の方は二方面に特色、スキイの方は云ふに及ばず、學校の試験を二十一も合宿し乍ら受けて終うてんだから凄いいことは押して知るべし。他は未だ豫科へ入つたばかりの若僧二人、通稱チョコにクン洲。

四人の話で何時も出るのが洋行話、誰が一番先に行くんだ。まあ若僧はどうしても年の順さとやる。まあそうだなあとは御年長の御返事。

朝六時に起床してスロープまで四人で出掛けて行つて、二人の若僧が主となつて飛び出す。二人が五六本飛ぶともう歸宅せねばならぬ時間が来る。走つて滑つて歸つてスルスルとカツコンで學校の一時間目に間に合ふ汽車を目がけて停車場へ駆けつける。列車時間は琴似發八時十分過ぎ。

かうした合宿の生活から將來どんな人間が養出されたかは知る人のみ知る。行き方は夫々異つて居ても心と心との結びは永久に離れ相にもなくなつた。もう今は當時の並洲は京都帝大のプロフエツサー、後ちゃんに臺灣大學のプロフエツサー、チョク洲は一年早く農學士としてもう鶴屋さんで一生懸命、クンはお醫者様、是から後が又お互に變つて行くこつたらう。職業が變つても會へばまるで兄弟見たいなものだ。つらい、悲しい想ひもなく平氣で此冬を過ごせて、その上人間らしい精神的教訓に生きることが出来たことが何よりの自分の收穫であつたと今でも思つて居る。

熊の道話

熊の道路

山に行つても熊の足跡を見るのは餘り氣持のよい事でない。之はよく河原の砂地や軟らかな土の上等に見られるもので、一尺幅もある足跡等に接する時は、思はずその足跡の主を想像せられずには居られない。そうでない時には熊の歩いた跡はよく草や笹がなびいて居る事がある。數十貫もある奴が四つ足でのそ／＼歩くのだから、軟かな草は奇麗に一定の幅だけ倒れて居て之が何處までも草のある限り續いて居る。又随分太い熊笹の密生して居る處でも。可成りはつきりした跡が付いて居る事がある。

山が深くて熊の多い所では、熊の歩く所は大抵一定して居るので自ら熊の路が出来

る位である。こんな所には以前はよくアイヌがアシ矢を仕掛けておいた相で、僕等も大分注意を受けた事がある。或人の話によると熊が通行の際その前足が弓矢の装置に觸れた時、矢は丁度熊の胸へ向つて自然に放たれるやうになつて居るとの事であつて従つて二人づれの人間が相接して歩いて行くのは非常に危険であるそうである。即ち前の人がそのアシ矢を發して、後の人の胸のあたりへ射る事になるのであるから、こんな疑ひのある所では二人は相當の距離を距てゝ進まなければならぬわけである。北海道の高地でハヒ松と火口壁との境を爲して居る尾根等は、熊の歩くにも都合がよく従つて熊の道であるとすれば、熊に出逢ふ機會の多い外に、アシ矢の危険もあるらし

い。

又時として熊の道は山中での迷路となる事がある。それは深山等では甚だ珍しい程良い道路にひよつくり出逢つたりする事があつて、その道を識らずに辿つて行くとその道は樹枝状に至る所で分岐して慣れない人を惱ます、その中の或る枝の路を進んで行くとそれは間もなく一寸した葡萄蔓の茂みの前で突然消え失せ、又他の路を辿つて行くと之も何時の間にか行きつまりに達して引返さねばならなくなる、そうかと思ふと反對側の山へ向つて立派な道がはつきりと全然別の方向に向つて走つて居て、益々行く人を混亂せしむる。そして之等の路に拘泥して居る間は日が暮ても決して里に歸る事が出来なくなる程との事で、この話は天鹽の大學演習林内の實習の歸りの出来事である。そして其處は從來殆ど人の入つた事の無かつた地域であるとの事である。

北大山岳部々報刊行に就いて

昨年北大山岳部が部報第一號を刊行し、その後一年半の登山記録を集めて、再び部報第二號を刊行することになりました。

若き誕生の山岳部の眞摯な歩みは北海道の山岳を愛せられる方々には必ずや多大な功獻を致すものと確信致します。

尙詳細を左記に示すこ

体 裁

菊版 英國製コットン紙 ポイント活字 約三百頁 寫眞十五葉

豫定價格金二圓 送料 十二錢

刊行期日

十一月初旬 豫約〆切 九月末日

▽内

容△

- 一、五月の蘆別夕張岳連峰 山口健兒
- 一、日高山脈アイヌ語考 同
- 一、日高トツタベツ岳及幌尻岳スキー登山 伊藤秀五郎
須藤宣之助
- 一、北海道西海岸の山 伊藤秀五郎
- 一、十勝川よりニベソツ山へ 山縣 浩
- 一、トツタベツ川を入り 山縣 浩
カムイエクウチカウシを登る
- 一、石狩川を廻りて音更川を下る 河合克巳
- 一、知床半島の山 原 忠平
- 一、カムイエクウチカウシよりシヒチシリ川同 同

- 一、ニベソツ(四月) 徳永芳雄
- 一、トツタベツ川―札内岳―幌尻岳 和久田弘一
- 一、三月の利尻岳 井田 清
- 一、國後島チヤチヤヌブリ 島村光太郎
- 一、千呂露川より新冠川を下る 野中保次郎
- 一、美生岳よりカムイエクウチカウシ 星 光一
- 一、北海道の山湖について 渡邊千尙
- 一、大朝日より飯豊山 星 光一
- 一、秩父の山旅 笠原慶雄
- 一、アリユウシヤン群島 高橋喜久司

申込所

北大文武會山岳部々報編輯係

振替口座小樽一四七七二番

札幌北五、西十五、須藤宣之助方

北大スキー部第十七シーズン略報

五月二十三日 午後三時より醫學部南講堂に於てオリンピック大會

會よりの歸朝選手報告會開催、選手の御土産なるサンモ
ーリツツに於けるスキー大會、コルチナに於ける萬國學
生スキー大會の幻燈寫眞の映寫、及び前記大會とノール
ウエー、ホルメンコーレンに於ける大會の活動寫眞の映
寫ありて盛會裡に終る。

同夜會場を變へて歸朝選手歡迎會開かれたり。

八月二十六日 献上模型ヒツテの製作者を伴つて伊藤君バラダイ

スヒユツテへ行く。

九月二十日 故岡村源太郎氏遺稿集出版に付き打合せをなす。

九月二十六日 十七シーズン新幹事決定。

主任幹事 伊藤

庶務 宮下、武野、植地、松田、辻岡

會計 井出

圖書 藤本、楠見

レース 長田、中村

ジャンプ及コンバインド 清水、宮村

山 宇都宮

同二十七日 學生集會所に於て最初の幹事會開催。

同二十八日 秩父宮殿下御成儀奉祝會舉行。

十月二十八日 午後六時より山とスキーの會に於て幹事會開催。

十七シーズン、モノグラム推選、新入生歡迎會の打合せ
なす。

十一月八日 新入生歡迎會開催、盛大なりき。

同 九日 スキー及靴の取次を行ふ。

十二月十日 インターカレッジ代表委員會出席の爲伊藤君上京

十二月十七日 山とスキーに於て午後七時より幹事會開催。代表

委員會決定事項報告、冬期合宿の打合せありたり。

同 十八日 冬期合宿準備の爲先發三名出發。

同 二十日 一行六十八人札幌驛を午前八時四十九分出發、青

山温泉へ向ふ。合宿申込は百二十人ありしが、ある出來事

の爲に歸省者多く斯道熱心の者のみ六十八人午後一時昆

布驛着、二名を除く他全部スキーを着けて青山温泉へ向

ふ。午後四時青山温泉着、夜、班長會議、練習方法決定、

起床午前七時まで朝食七時半まで、出發八時、晝食十二

時—一時、夕食午後五時、

同 廿一日 午前八時第二班のラツセルに依り各班スロープへ至る。第四、第五班藻岩山登頂各班午後三時歸巢。

同 廿二日 快晴、春の如し。第三、四、五班ニセコアンヌプリ登頂、第一班シヤンツエを作り猛練、第三班コースを定めて走法研究。

同 廿三日 吹雪、初班藻岩登頂、吹雪のために練習を妨げらる、大野部長來泉午後六時半より懇親會八時散會。

同 廿四日 無風降雪甚だし、新雪一尺餘。第一班ニセコアンヌプリへ。第三、四、五班チセヌプリ登頂第二班伴君のコーチにより走法研究、初班スロープにてステムホーグン練習。

同 廿五日 天氣晴朗。第一、二班はジャンプ・長距離練習。特に第一班ジャンプの進歩著し、第三班イワチヌプリ及名無山の登頂、初班ニセコアンヌプリの頂上を極む。

同 廿六日 第三班チセヌプリ及びチセ後方の名無山登頂、夜合宿十週年記念として温泉よりシルコ、ゾーニの馳走あり、引續いて合宿解散コンパあり余興續出盛會裡に十時散會。

同 廿七日 午前九時半温泉出發、昆布驛午前十一時半着。札幌五時着、大野部長の發聲にてシーハイル三唱解散す。今シーズンの合宿は第一班のシユブルング、第二班のラングラウフに於て伴君の名指導により新しく進むべき道を見出し得たる記念すべきものなりき。

一月二日 手稻山初登山、積雪例年に比して遙に多し。

同 三日 インターカレッツテ出場選手合宿を圓山にて始む、夜に至りて稀らしき大雪ありたり。

同 四日 午後六時より圓山後樂園に於てインターカレッツテ準備委員會を行ふ。役員、コース等に付て打合せをなす。

同 五日 伊藤君、竹内君(法) 富永君(早)と共にインターカレッツテ競技會の事に付き山岳會へ行く。

一月六日 ノールウエー三選手を午前七時五十三分札幌驛頭に迎ふ。麻生君、廣田君共に來札。

伴君大鰐より歸札、ノールウエー三選手午後三時、猛烈なる吹雪をおかして三角山へ到着。

同 七日 午前中サツボロシヤンツエ右下に於てノールウエー三選手より走法のコーチを受く。午後シユブルングのコーチを受く。

同 自八日 至十一日 ノールウエー選手の走法及びジユブルングのコーチありたり。

同 十二日 インターカレッツテスキー競技大會 午前四〇分、午後復合の十八籽、四〇籽に於て當部は 二着(山田君) 四着(宮下君) 六着(片山君) 複合十八籽に於て 一着(宮村君) 二着(杉村君) 三着(村本君) 五着(神澤君) 七着(入江君)を獲得す。

同 十三日 午前復合のジャンプ、午後十八籽。複合のジャンプに於て當部は 一等(神澤君) 三等(杉村君) 四等(龍田君) 十等(宮村君)を得て複合競技に於て當部は 一等(神澤君)

二等(杉村君) 四等(宮村君) 六等(村本君)を得たり。十八軒に於ては 三着(中村君) 五着(奥井君) 六着(宮本君)を得たり。

同 十四日 午前ジャンプ午後リレー。午前のジャンプに於て一等(伴君) 二等(神澤君) 三等(村本君) 四等(宮村君) 六等(杉村君)を得、午後のリレーに於て當部は 一等(山田・中村・宮下・長田)を得たり。かくして第二回インターカレッジスキー競技大會に於て當部は六拾一點を得て大勝せり。

一月十九日 北海道豫選、午前四〇軒、三着(中村君) 複合競技に於て一等(長田君) 三等(山田君)

同 二十日 高松宮殿下御台覽ジャンプ當部よりの出場者 伴君、村本君、神澤君、杉村君、

北海道豫選のジャンプに於て新進關君五等入賞す。

同 二十一日 高松宮殿下スキー御登山御案内として當部々員七名大野部長と共に出發：詳 山とスキー八十九號所載。

同 二十四日 當部選手十一名全日本スキー大會出場の爲高田へ向ふ。

二月十日 赤城山に於てスキージャンプ大會開かる。當部より伴、村本、神澤、杉村、植地、關、宮村の諸君出場す

手稻山下降競争舉行、

優勝チーム(宮本、宮下、中村) 十九分四五秒。

個人優勝 宮本君 十七分。

二月十七日 學内大會三角山々麓に開催。

十八キロ 一、奥井。二、長田。三、山田。四、稻葉。

五、黒田。六、小館。

七キロ 一、伊藤。二、弓納持。三、新谷。

ジャンプ 一、村本。二、杉村。三、武野。

複合 一、長田。二、山田。三、黒田。

二月二十三日 學生集會所に於て卒業生送別會を開く十八シーズン主任幹事 中村君に決定す。



雜 錄

各校昭和四年夏期登山計畫

山形高等學校山岳部

1. 三山 鳥海
2. 朝日 縦走
3. 大又澤ヨリ飯豊へ
4. 魚沼駒ヶ岳ヨリ平岳ヲ經テ尾瀬沼へ
5. 越後魚沼駒ヶ岳
6. 根子川チ上リテ朝日岳ヅンメルシー生活
7. 飯 豊 生 活
8. 實川谷ヨリ牛首大日へ
9. 十勝ヨリヌタツクカムウシユヘ(大雪山)へ
10. 甲斐駒ヨリ白峯三山

松本高等學校山岳部

北アルプス

- 第一班 燕岳、常念岳、槍嶽縦走

第二班 烏帽子、槍縦走

第三班 後立山脈縦走

第四班 笠ヶ岳、双六岳、槍ヶ岳縦走

第五班 針ノ木越え、立山、劍、黒部峡谷

南アルプス

第六班 白根、三山縦走

特別班

第七班 上高地キャンピング岩登り生活

第八班 劍岳、岩登り生活

第九班 穂高岩小屋生活

第十班 飛彈側よりの穂高岳登攀

第十一班 槍ヶ岳を中心としてのクレッツェライ

第十二班 駒及び鳳凰山岩登り生活

早稲田大學山岳部

第一隊 上高地キャンピング

第二隊 燕岳より槍・上高地へ

第三隊 乗鞍岳より槍へ

第四隊 烏帽子・槍縦走

- 第五隊 大瀧山・常念より槍・穂高
- 第六隊 笠岳より槍・穂高
- 第七隊 高瀬入り槍・笠・上高地
- 第八隊 高瀬入り縦澤湖行笠・上高地へ
- 第九隊 千丈澤生活
- 第十隊 穂高生活
- 第十一隊 穂高生活
- 第十二隊 穂高生活
- 第十三隊 白馬岳より鏡温泉へ
- 第十四隊 白馬より鹿島鎗・爺岳へ
- 第十五隊 白馬より剣・立山
- 第十六隊 針ノ木越へ立山・剣へ
- 第十七隊 烏帽子より薬師・立山・剣岳
- 第十八隊 早月川湖行劔・立山へ
- 第十九隊 立山川湖行劔岳
- 第二十隊 地藏鳳凰より白峰三山
- 第二十一隊 鹽見岳より白峰・甲斐駒
- 第二十二隊 赤石岳生活

立教大學山岳部

- 第一班 烏帽子岳より槍ヶ岳
- 第二班 後立山縦走

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> F 班 E 班 D 班 C 班 B 班 A 班 | <ul style="list-style-type: none"> 藥師岳より槍・穂高縦走 東澤より黒岳・槍・穂高縦走 劔岳より針ノ木越 槍・烏帽子より劔・小黒部方面 甲斐駒・鋸岳・仙丈より白峰へ 赤石山脈縦走 |
|--|--|
- 特 別 班
- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 劔岳生活 劔岳早月尾根登攀 穂高連峯 黒部川湖行 金木戸川より黒部川へ 三峯川湖行 | <ul style="list-style-type: none"> 第八班 第七班 第六班 第五班 第四班 第三班 |
|--|--|

岡村源太郎遺稿集

スキーデイスタンスレース

完成

限定五〇〇部

体裁 菊判 三三〇頁 假製綴

紙質 上質紙 寫眞版六葉

實價 金貳圓

發兌 札幌 山とスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稲穂町梅屋運動具店宛にお願ひ申します。

山とスキーの會



SKI HEIL

スキ一
ト

其用與全般

中野商店

一寺入即又ハ

第一級
大量生産

札幌



圖林新大演戲得美

東京江〇〇番

山ニスキ一の會

GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!



具用其ト一キスルナ秀優

樽 小
 店 具 動 運 屋 梅

北海道帝國大學キス一部及同山岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一条十番街

木本靴店

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和四年六月二十日印刷

昭和四年六月廿五日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo

No. 93 Junio 1929. Sapporo, Jpanujo.

—メタに比類なき—
冬期登山・家庭・旅行に
携帯便利・安全燃料

『METAメタ』

50錠入一函 ¥ .80

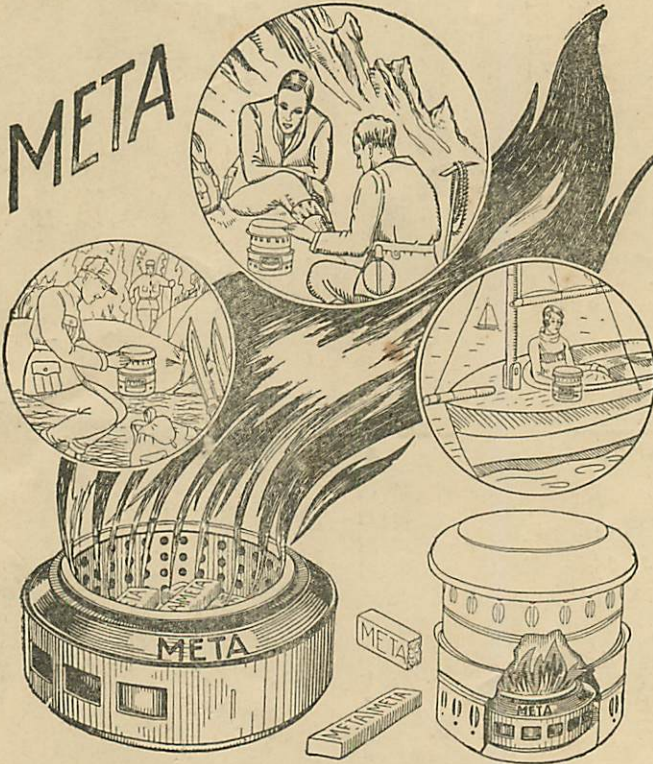
メタ、コツヘル・アブラート (アルミ製炊事具の類)

No. 80 (2pints)	¥ 4.50	No. 90 (フライパン)	¥ 1.50
MARIO (1½")	¥ 3.00	No. 50 (META-BURNER)	¥ 1.65
No. 70	¥ 2.50		

北海道地方

梅屋運動具店・富貴堂・小谷運動具店
今井呉服店・川口屋銃砲店運動具部

品切れの節は
直接美滿津へ



全國運動具店にあり・メタに比類なし

瑞國「メタ」安全燃料 及びアルミ容器 日本運動具店總代理店

美滿津商店

東京 本郷 赤門前

振替口座 (東京) 760
電話 (小石川) 845

大正三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和四年六月二十日印刷
昭和四年六月二十五日發行

山とスキー

第九十三號

定價金參拾錢